

日中関係の深化に向けた 民間交流の可能性とあり方

張 兵



A5判 360頁
はる書房
【本体 3,200円 + 税】

桜美林大学・北京大學學術交流論集
編集委員会編

日中新時代の基本的視座
——教育・環境・文化から

本書について、『中国研究月報』二〇一九年一月号にも評者による「書籍紹介」を掲載したが、紙幅の関係で省いた部分が多かったので、ここではその内容を大幅に加筆修正して「書評」として再度掲載したい。

本書は桜美林大学と北京大学が二〇一三年から二〇一六年の間に開催した四回の国際学術シンポジウムの成果をまとめたものである。両大学は一九九八年から毎年一回日中関係についてのシンポジウムを行い、四年ごとに論集を刊行しており、本書はその四冊目に該当する。これまでの三冊は、二〇〇四年刊行の『新しい日中関係への提言——環境・新人文主義・共生』、二〇〇九年刊行の『日本と中国を考える三つの視点——環境・共生・新人文主義』、そして二〇一四年刊行の『教育・環境・文化から考える日本と中国』の三つ

である（いずれもはる書房より刊行）。三冊目からキーワードが「新人文主義」、「共生」から「教育」、「文化」に変わり、「より具体的な議論に機軸を移した」（一七頁）。これまでの三冊と比べてみれば、四冊目である本書は、『日中新時代の基本的視座——教育・環境・文化から』とのタイトルからわかるように、これからの日中関係の深化に向けた民間交流の可能性とあり方について、「教育・環境・文化」という三つの領域に分けて具体的かつ学術的に議論する点が特徴として挙げられると言つてよからう。

本書は五つの部分から構成されている。

第一部「社会のニーズと大学教育の多様化」に収められている三篇はインターネットを利用した社会向けの遠隔教育（MOOC）、中国における現代の大学制度、日本の高等教育

の変遷に関する議論である。「eラーニング——遠隔教育MOOCの国内外の動きと桜美林大学の取り組み」(佐藤東洋士)は、eラーニングの歴史を紹介した上で、日本の大学におけるeラーニングの現状と課題について桜美林大学を事例に論じている。近年中国の大学は、中国独自の道——「中国的特色」を持つ高等教育発展の道を歩もうとされているが、「現代的大学制度の「地元資源」(呉志攀)では、「中国的特色」とは何かについて北京大学副学長を務める著者が要領よく答えている。「高等教育の変化と日中の相互理解」(佐藤東洋士)は、日中の相互理解における高等教育機関の役割について独自の視点を提供し、「高等教育機関は、立場が違っても意見を戦わせる、という環境を提供しなければならない」(四八頁)との指摘が鋭い。

第二部「時代の変化と大学教育の質保証」の三篇も大学教育をめぐる議論であるが、主に大学における職業教育と大学教育の社会的責任、大学教育の質保証、及び学生を中心とする大学の改革を取り上げ、日中における大学教育のあり方や未来志向の大学像について現状と展望を述べており、それぞれの大学の教育方針から教育内容、高大接続問題、求めている人材像に至るまで議論が多岐にわたっている。

第三部「大気と水資源と建造物」に収められた七篇は、中

国の伝統的な水文化、中国の水資源の問題と対策、日本の大気汚染とその対策の歴史、中国の大気汚染の現状と対策、地球温暖化と気候変動の関係、中国の教育施設の建築材料などに含まれる有害物質の問題、日本の公共施設の建築材料の安全性配慮の歴史と現状について論じている。「中国大気汚染の現状と特徴」(謝紹東)では、注目されている中国における大気汚染の現状とその特徴、原因について様々な観測データから綿密に分析しており、「日本の大気汚染の改善の歴史」(秀島武敏)は中国における大気汚染問題の参考として、日本、特に北九州市がどのようにして大気汚染を克服してきたかについて詳しく紹介している。これまで研究されてこなかった日中両国の学校施設における建築材料の安全性を取り上げる二篇(「教育施設の建材などに含まれる難燃剤の人体に与える影響」(張劍波)、「日本の公共施設における建築材料の安全性に関する配慮の歴史と現状」(片谷孝孝))は非常に珍しくて貴重な研究である。

第四部「環境保全の取り組みと意識」には四篇の論文が収録されているが、日本の環境保全の取り組みについて取り上げた、日本における立法と行政管理による不法投棄の対策、東京都と桜美林大学が連携する環境保全事業と環境保全人材の養成のほかに、歴史上における人間と自然との関係及びそ

の意識について論じた日本の環境史、中国の古代詩歌から見た自然観についての論考も含まれている。現在における環境問題との視点からイメージしにくいようであるが、「前近代日本における自然環境と人間社会」（ブルース・L・バートン）によると、「日本の社会は、（略）自然環境から影響を受けるだけではなく、自然環境に影響を及ぼすことも多くなってきた」（二四七頁）といい、「中国の古代詩歌に見られる自然観について」（程郁綴）では「中国の詩歌」に「崇拜と畏怖の対象としての自然観」、「楽しみ親しむ対象としての自然観」、「親しみながら自己啓発の対象とする自然観」（二四九頁）という三つの「自然観」が見られ、中国の文化史には自然に親しんできた長い伝統があると指摘している。こういった新しい研究視点と研究スタイルに強い感銘を受ける。

第五部「日中文化の交流——今と昔」に収録されているのは、日本の漢字・漢語の変遷、また北京大学図書館所蔵日本刊行中国古籍について報告した二篇、中国の漫画史とその特徴、ならびに宮崎アニメにおける環境・平和のモチーフを考察した二篇、日本と中国の茶文化を論じた二篇の計六篇である。「日本における漢字・漢語の現状と将来」（寺井泰明）は、古代以来の漢字・漢語の受容を考察し、「漢字自体の特性と生命力に加えて、簡略化、字数制限、機器による省力化な

どといった外的条件が整備され、さらには長い歴史が育んだ人々の愛着心や漢字・漢語の文化が加わり、漢字・漢語の生命は、人類の歴史が続く限り、日本においても中国においても、絶えることの無いもの」（二七九頁）とする。それに対して、「日本の茶文化」（高橋静豪）と「中国茶文化の発生とその心」（藤軍）の二篇は、日中両国における「茶文化」はその起源においては同一であっても、その発展、展開はお互いの文化により異なっていると見ており、日中文化の理解は奥深いものであると読み取れる。

本書の意義として最も挙げたいのは、一般論としての日中関係論ではなく、教育や環境、文化といった具体的な分野における日中それぞれの現状及び日中民間交流の可能性とあり方について考察し検討していることである。日中交流の重要性についてはこれまで様々な研究があったものの、歴史的経験や経済関係、地政学的視点から日中友好往來の歴史の意義、日中経済の相互依存、隣国同士として仲良く付き合う必要を強調するものが多く、本書のように具体的実務的視野から日中交流の可能性とあり方について深く論考するものはそれほど多くない。例えば、「eラーニング——遠隔教育MOOCの国内外の動きと桜美林大学の取り組み」では大学現場におけるeラーニングの取り組みから「eラーニングの推進

と同時に海外の大学との協力関係を構築していく必要」(三五頁)を明確に示した。「高等教育の変化と日中の相互理解」では戦後七〇年間の高等教育の変化に踏まえ、「研究者であれば、たとえ歴史観は違っても共通の課題解決のために協力をすることもできる」(四八頁)との見地を示している。「地球温暖化と気候変動——その考え方と理解増進活動」(坪田幸政)は北京と東京で観測されたデータ(気温と降水量)から、地球温暖化と気候変動に対する日中両国の理解増進活動と共同研究の重要性を見出している。「日本における漢字・漢語の現状と将来」は、「日本における漢文教育の退潮が、文化全体の質的变化を結果することが危惧される」(二七九頁)と警鐘を鳴らす。「前世紀中国名作漫画とその特色」(呉志攀)は、中国名作漫画とその特色に対する分析から、中国「新世代の若き漫画家」の多くは直接日本の「マンガ」の影響を受けて大きく成長してきていることを明らかにしている。

本書のもう一つの大きな意義は日中両国の研究者が日中間交流の可能性とあり方といったテーマについてそれぞれ自分の研究領域から知見と議論を述べ合っていることである。双方の研究者は、「環境、大学教育、文化の各方面において、日本と中国の問題意識が次第に接近してきて」おり(四頁)、共通の課題について「両国が研究活動を通して共に解決に向

けるの道筋を模索することは、お互いの国にとってだけでなく地球全体の将来にとって非常に意義深いことである」(四八頁)と一致している。このように、「共通の関心事」をめぐる双方の研究者が「厳粛かつ活発な議論」(八頁)を行うのは本書の特色の一つだと思われる。例えば、「ビジョン(Vision)の交代——今、大学の責務とは? 質保証を再考する」(田中義郎)では、日本における大学教育のビジョンについて以下のようにその現実を懸念している。「大学は、若者の技能を洗練し教養を高め思慮を深めるといった場から、期待を込めて、経済や国際競争力の原動力として人材育成を担う場へと急速に変化した。自ら変化を望んだかどうかはともかく、社会認識上、明らかに変化したのである。しかし、大学の内部変革は進むどころか、実際には、混沌と化した」(六五頁)という。それに対して、「学問探求か職業訓練か——消費社会における大学生の時間の使い方を事例に」(林小英/呉霞)でも、中国の「大学は職業訓練の施設? それとも學術の理想を求める共同体?」(五一頁)との問題を提起し、これは中国の大学が直面している「難問」とした上で、学問を重視する教授たちは職業訓練科目を軽蔑するものの、多数の学生が就職のために大学進学を選んだとの調査結果から、「現代の大学生は、師弟共に深遠なる学問探求に沈潜するという伝

統から古典的大学の記憶を持ちつつも、日々繋がりを深める社会や市場に対し必要な対応を迫られている」(五一頁)と分析し、大学における職業訓練の妥当性を肯定し、その重視を主張している。

本書の課題として、一部の論文は自国の現状や経験などに関する論考にとどまっており、相手国への提言までは行わなかった、ということが挙げられる。特に第三部(第五部の環境、文化に関する論文の多くは、日中それぞれにおける問題の背景や、現状、解決策などについて見事に明らかにしているが、それが相手国に対してどのような教訓になるかについてほとんど言及していない。自国のことについて明らかにしたこと自体はもちろん大きな意味があり、読者もその中からヒントとなるものがある程度体得することができるかもしれないが、日中交流の可能性とあり方について議論することを目標とする以上、一歩進んで自国の経験教訓等を相手国への提言として明確に示したほうがよかつたと思われる。

なお、上述二三篇の論文は、日本側研究者による日本語論文二篇と中国側研究者による中国語論文二篇からなり、日本での出版を考慮して日本語のタイトルと要約が付されている。中国側の研究者による中国語論文を原文で掲載するのは本書の特徴の一つであり、研究者たちにはとって互いに原

文のままでも特に問題がなからう。しかし一方、研究者以外の読者の関心を引き、内容を正確に伝えるためには、日本で出版するに当たっては中国語の論文を日本語に訳したほうがより効果的であつただろう。

本書から示されているように、相互理解の促進は、日中両国にとつて古くて新しい課題であり、それを実現するためには様々な分野における双方の地道な努力が必要である。今、日中関係改善の気運が高まっている。本書の刊行により、日中間交流の可能性とあり方に関する研究がより活発になつていくことを期待する。

(ちょう・へい 山梨県立大学)